

# 令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

令和3年6月1日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <p>秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251</p>
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表は令和3年6月29日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 <a href="https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/">https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</a> ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。<a href="https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/">https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</a> ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。<a href="http://www.famic.go.jp/">http://www.famic.go.jp/</a> ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。<a href="http://www.e-komachi.jp/">http://www.e-komachi.jp/</a></p>	

## I. 予報の要点

水 稲	<p>葉いもちの感染量は平年並と予想されます。余り苗は直ちに処分してください。水面施用剤を使用する場合、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。</p> <p>斑点米カメムシ類の発生時期は早い、発生量はやや多い～多いと予想されます。水田除草剤を適切に使用し、ホタルイ類やノビエの発生を抑えるとともに、農道・畦畔や休耕田の除草を行ってください。</p>
畑 作	<p>小麦では、赤かび病の発生量がやや多いと予想されます。1回目（開花始期）の防除を行っていない場合は、直ちに防除してください。</p> <p>大豆では、タマナヤガの発生量がやや少ないと予想されます。耕起前に雑草の多かったほ場や例年被害のみられるほ場では、薬剤による防除を行ってください。</p>
野 菜	<p>ねぎ（夏どり）では、べと病の発生量は平年並と予想されますが、予防や発病初期の防除に努めてください。</p> <p>キャベツでは、コナガの発生量がやや多いと予想されますので、同一系統の薬剤の連用を避け、作用機作の異なる薬剤をローテーションして使用してください。</p> <p>えだまめでは、ツメクサガの発生が多いと予想されますので、幼虫の発生初期に防除してください。</p>
果 樹	<p>果樹カメムシ類の発生はりんごでやや多い、なしで多いと予想されます。園地への飛来状況をよく観察し、飛来数が多い場合は薬剤を散布してください。</p> <p>ぶどうでは、晩腐病がやや多いと予想されます。開花前の防除を徹底し、発病花穂は見つけ次第摘み取り、適切に処分してください。</p>

## Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	葉いもち	全県	平年並	—	平年並
	ばか苗病	全県	—	平年並	平年並
	イネミズゾウムシ	全県	早い	やや多い	やや多い
	イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	全県	やや早い	平年並	やや少ない
	イネミギワバエ(第2世代) (イネヒメハモグリバエ)	全県	早い	平年並	平年並
	斑点米カメムシ類(越冬世代成虫)				
	アカスジカスミカメ	全県	早い	—	やや多い
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	全県	早い	—	多い
フタオビコヤガ(第1世代) (イネアオムシ)	全県	やや早い	やや少ない	やや少ない	
小 麦	赤かび病	全県	平年並	—	やや多い
	うどんこ病	全県	—	—	やや多い
大 豆	タマナヤガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	多い
ね ぎ	べと病	全県	—	平年並	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	—	やや少ない
キャベツ (初夏どり)	菌核病	全県	平年並	—	平年並
	コナガ	全県	—	平年並	やや多い
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	平年並
	ヨトウガ(第1世代)	全県	やや早い	平年並	平年並
えだまめ	べと病	全県	—	—	平年並
	ネキリムシ類	全県	—	—	やや少ない
	ツメクサガ	全県	—	多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	やや早い	—	やや多い
	モニリア病 (実ぐされ)	全県	—	やや多い	やや多い
	黒星病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	平年並	—	平年並
	輪紋病	全県	平年並	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	早い	—	平年並
	ナミハダニ	全県	—	平年並	やや多い
	ハマキムシ類(第1世代) (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ)	全県	やや早い	やや多い	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	—	やや多い
	キンモンホソガ(第2世代)	全県	やや早い	—	やや少ない
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	—	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	—	平年並
	芽枯病	県南部	平年並	やや少ない	やや少ない
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病(花蕾発病)	県南部	—	—	やや多い
	チャノキイロアザミウマ	県南部	平年並	—	やや多い
飼料作物	アワヨトウ	全県	—	やや多い	やや多い

### Ⅲ. 発生予報と防除対策

#### A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感染時期 [全般発生開始期]	感 染 量
1. 葉いもち	平年並 (前年よりやや遅い)	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、育苗期巡回調査における稲わら及び籾殻の確認地点率は、育苗施設内では1.2%(平年0.7%)で平年並、育苗施設周辺では1.2%(平年3.9%)で低かった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。

イ、ベンレート水和剤又はビームゾルによる育苗期のいもち病防除をしなかった場合、いもち病の持ち込みや早期に伝染する可能性が高いため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。

ウ、乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。

エ、葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。散布時期は、移植栽培では6月15日頃(6月12~18日)、直播栽培では6月23日頃(20~25日)である。

オ、箱施用剤又は側条施用剤を使用していないほ場では、感染苗の持ち込み等により早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病した場合は、直ちにオリゼメート粒剤又はルーチン粒剤を散布し、その15~20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病した場合は、オリゼメート粒剤又はルーチン粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤又はノンブラス剤)の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ばか苗病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、育苗期巡回調査における発病箱率は1.6%(平年1.9%)で平年並、発病地点率は9.3%(平年14.0%)でやや低かった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. イネミズゾウムシ	早い（前年より早い）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（- / ）。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（気象観測地点：秋田）による越冬後成虫の侵入盛期は6月3日（平年6月11日）、密度盛期は6月7日（平年6月14日）と予想されている（- / ）。

ウ、5月1～4半旬の予察灯における越冬後成虫の総誘殺数は、12頭（平年2.1頭）でやや多かった（ / +）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月上旬に越冬後成虫が1株当たり0.3頭（食害株率90%以上に相当）以上の場合は、シクロサルU粒剤2又はトレボン粒剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. イネクビボソハムシ （イネドロオイムシ）	やや早い（-）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（- / ）。

イ、前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（ / -）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、産卵盛期（6月上～中旬）の卵塊数が1株当たり0.5を超える場合は、ふ化盛期（6月中旬）に茎葉散布剤で防除する。ただし、有機リン剤、カーバメート剤又はプリンス剤に対する感受性が低下している地域では、トレボン粉剤DL又はMR、ジョーカー粉剤DLを使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. イネミギワバエ（第2世代） （イネヒメハモグリバエ）	早い（-）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量と日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている（- / ±）。

イ、予察灯における越冬世代成虫の初誘殺日は、五城目町が5月19日（平年5月30日）、秋田市が5月14日（平年5月27日）、由利本荘市が5月19日（平年5月31日）で、いずれも早かった（- / ）。

ウ、5月中～下旬の巡回調査（県北部10地点、県中央部13地点、県南部7地点）における1株当たり卵数は県北部が0.30個（平年0.20個）、県中央部が0.49個（平年0.48個）、県南部が0.01個（平年0.03個）でいずれも平年並だった（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、第1世代幼虫による食害は6月上旬から目立ってくると予想されることから、5月25日発表の防除対策情報第5号を参照して対策を行う。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（気象観測地点：秋田）による第2世代幼虫の防除適期は6月4半旬頃と見込まれる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 斑点米カメムシ類（越冬世代成虫） アカスジカスミカメ	早い （前年より早い）	やや多い （前年より多い）
アカヒゲホソミドリカスミカメ	早い （前年より早い）	多い （前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ、牧草地すくい取り調査におけるアカスジカスミカメの越冬世代幼虫、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代成虫の出現時期はいずれも早かった（-/ ）。

ウ、前年収穫期（9月3～4半旬）に行った畦畔すくい取り調査から越冬量は、アカスジカスミカメでやや多く（ /+）、アカヒゲホソミドリカスミカメは多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月上旬から繁殖地となる農道・畦畔、休耕田等の除草を地域でまとまって行う。

イ、水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行う（5月7日発表の防除対策情報第4号を参照）。雑草の生育状況を確認し処理時期が遅れないようにする。

ウ、一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤、少量拡散型粒剤は藻類・表層剥離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層剥離の発生前から発生初期までとする。

エ、一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. フタオビコヤガ（第1世代） （イネアオムシ）	やや早い（-）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量と日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ、育苗期巡回調査における育苗施設内の成虫数は0.08頭（平年0.48頭）でやや少ない、卵確認地点率は2.3%（平年7.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、フェルテラ剤（ブイゲットフェルテラ粒剤、D r. オリゼフェルテラ粒剤等）、スピノ剤（プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤等）のいずれも施用せず、食害が多く実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチューンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DL、MR. ジョーカーEWのいずれかを散布する。

### 8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
縞葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	—	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

## B 小麦

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 赤かび病	平年並(—)	やや多い(前年よりやや少ない)

#### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、5月中旬以降、降雨が続いていることから、感染量は多いと推定される( /+ )。

ウ、各地域振興局管内の定点調査によると出穂期は、秋田(銀河のちから)は5月10日(平年5月10日)で平年並、仙北(ネバリゴシ)は5月16日(平年5月20日)でやや早い、平鹿(ネバリゴシ)は5月23日(平年5月19日)でやや遅かった(±/ )。

#### (2) 防除上注意すべき事項

ア、まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルで防除する。その後7～10日後に2回目の防除をする(下記イ、の項参照)。

イ、2回目は、1回目の防除から7～10日後にトップジンM水和剤、トップジンM粉剤DL、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかで防除する。

ウ、耐性菌の出現を回避するため、同系統の薬剤の連用を避ける。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. うどんこ病	—	やや多い(前年並)

#### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される( /+ )。

#### (2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は赤かび病と同時防除が可能である。

イ、耐性菌の出現を回避するため、同系統の薬剤の連用を避ける。

### 3. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
さび病	—	—	平年並	赤かび病との同時防除が可能である。

## C 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. タマナヤガ	—	やや少ない（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は35頭（平年64.5頭）でやや少なかった（ /-）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 食葉性鱗翅目幼虫	—	多い（前年より多い）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月下旬のえだまめ巡回調査における50茎当たり幼虫数は0.5頭（平年0.1頭）で多かった（ /+）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、ツメクサガは年2回発生し、第1世代幼虫は主に6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ、発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。

## D ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年よりやや多い）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的に、ジマンダイセン水和剤等を散布し予防に努める。

イ、発病初期からオロンディスウルトラSC、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドM



Z等を散布する。

ウ、フェニルアミド系剤、カルボン酸アミド剤（CAA剤）は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

## E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	やや少ない（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、前年の9月の発生量はやや少なかったことから、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /—）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県北部で発生しやすい。

イ、多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にベフドー水和剤、ジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等を散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。

ウ、発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげ等の発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤等を散布する。

## F キャベツ（初夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 菌核病	平年並（—）	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、前年の初夏どり（収穫期）での発生量は平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ネクスターフロアブル、ロブラール水和剤等を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. コナガ	—	やや多い（前年よりやや少ない）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける4月5半旬～5月5半旬のフェロモントラップの誘殺数は134頭（平年162.1頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.02頭（平年0.02頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生初期で幼虫の密度が低い間は、遅効性だが残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。
- イ、生育期から結球期にかけて発生が多くなってきたら、ネライストキシシン系剤、アフーム乳剤、グレーシア乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、プリンスフロアブル、ジアミド系剤を散布する。なお、ジアミド系剤は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。
- ウ、コナガには薬剤抵抗性が発達しやすいので同一薬剤、同一系統の連用は避け、系統又は作用機作用の異なる薬剤をローテーションして使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. モンシロチョウ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.02頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ヨトウガ（第1世代）	やや早い（前年よりやや遅い）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ -/+）。
- イ、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月5半旬～5月5半旬の越冬世代成虫の誘殺数は1頭（平年1.5頭）でやや少なかった（ /-）。
- ウ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、コナガとの同時防除に努める。

## G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、連作を避け、排水対策を行う。また、種子伝染するので健全種子を用いる。密植や過繁茂を避け、風通しを良くする。被害残さを適切に処分する。

イ、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。  
 ウ、防除剤はフェスティバルC水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル、レーバスフロアブルのいずれかを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. ネキリムシ類	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市大豆予察ほのタマナヤガフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は35頭（平年64.5頭）でやや少なかった（ /- ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、タマナヤガの成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーF S 30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、タマナヤガは長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。また、沿岸部での被害が大きくなることがあるのであわせて注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ツメクサガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /± ）。

イ、5月下旬の巡回調査における50茎当たりの幼虫数は0.5頭（平年0.1頭）で多かった（ /+ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は年2回発生し、第1世代幼虫は主に6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ、幼虫の発生初期（若齢期）にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。

## H りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点落葉病	やや早い（前年並）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ -/± ）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月15日（平年5月16日）で平年並だった（ ±/ ）。

ウ、前年秋期の発生量は多かった（ /+ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除薬剤は約2週間の間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤、ユニックス顆粒水和剤47、ロブラール水和剤のいずれかを主剤に加用して使用する。ただし、これらの剤は年1回の使用とする。また、ポリオキシシンAL水和剤の効力が低下している園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI（ストロビルリン系）剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とし、保護殺菌剤（ベルコート水和剤、有機銅剤等）を加用する。
- エ、オキシラン水和剤、キノンドー水和剤40、キノンドーフロアブル、シトラノフロアブル、ドキリンフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ポリオキシシンO水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるので落花20日後頃まで使用しない。
- オ、ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花25日後頃まで使用しない。
- カ、ストライド顆粒水和剤はサビ果を発生させるおそれがあるので、落花30日後まで使用しない。
- キ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25はサビ果を発生させるおそれがあるので、落花40日後頃まで使用しない。また、千秋、王林では果実色に障害を生じるおそれがあるので7月上旬まで使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病 (実ぐされ)	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、5月中旬の巡回調査における花ぐされ発病果そう率は0.1%（平年0.1%）で平年並、発病地点率は18.2%（平年9.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、実（株）ぐされは翌年の伝染源となるため、見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 黒星病	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、5月中旬の巡回調査における発病花そう率は0%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。摘果作業の際は発病の有無をよく観察し、発病果実を園内に残さないように注意する。
- イ、過繁茂を防ぐため、新梢等の生育が旺盛な場合は、枝の配置を見直し徒長枝を整理する。
- ウ、落花25日後までは10日間隔で防除する。その後は2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。散布予定日に降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。
- エ、発生園ではQoI剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。
- オ、発生のない園地ではQoI剤を使用できるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤（ベルコート水和剤、有機銅剤等）を加用する。また、耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用回数を厳守する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 炭疽病	平年並（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月15日（平年5月16日）で平年並だった（±/）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間の間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアが伝染源となるので、園地の近くにある場合は伐採する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
5. 輪紋病	平年並（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月15日（平年5月16日）で平年並だった（±/）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間の間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。なお、本剤の使用回数は3回以内である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	早い（前年並）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、果樹試験場（横手市）の予察ほにおけるモモシンクイガの初誘殺は5月6半旬（平年6月1半旬）で早かった（－/）。

イ、前年秋期の被害果率は平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、産卵状況に注意し適期に殺卵剤を散布する。

ウ、合成ピレスロイド剤の散布適期は、県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

エ、交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。

オ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

カ、サイアノックス水和剤、スプラサイド水和剤、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温時や衰弱樹

には散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、5月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤も年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

ウ、ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは作用点が同一のため、連用を避ける。

エ、カネマイトフロアブルにアリエッティC水和剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にカネマイトフロアブルを希釈する。

オ、マイトコーネフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にマイトコーネフロアブルを希釈する。また、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、マイトコーネフロアブルとスミチオン水和剤40は混用しない。

カ、ダニサラバフロアブルにアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

キ、スターマイトフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にスターマイトフロアブルを希釈する。

ク、ダニオーテフロアブルを使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. ハマキムシ類（第1世代） （リンゴコカクモンハマキ） （リンゴモンハマキ）	やや早い（-）	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（-/ ）。

イ、5月中旬の巡回調査における被害花そう率は0.3%（平年0.2%）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、リンゴコカクモンハマキの防除適期は、県北部が6月5～6半旬、県中央部・県南部が6月4～5半旬と見込まれる。フェロモントラップ設置園では、誘殺最盛期の2週間後に防除剤を散布する。

イ、防除剤は、エクレスルSE、オリオン水和剤40、サムコルフロアブル10、ダズバンDF、ディアナWDG、テッパン液剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。ただし、ダズバンDFのリンゴコカクモンハマキ幼虫に対する効力が低下している地域では同剤を使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている ( /+ )。

イ、クサギカメムシの越冬量は平年並と推定される ( /± )。

ウ、県内6か所の防除適期決定ほにおける5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は86頭 (平年67.7頭) で平年並だった ( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期や飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。特に、山間部の園地では注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤等を散布する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分薬剤のため総使用回数に注意する。

エ、スプラサイド水和剤とスミチオン水和剤40は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40は、薬害 (黄変落葉) を発生させるおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ (第2世代)	やや早い (前年よりやや遅い)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている ( -/ )。

イ、前年秋期の発生量はやや少なかった ( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除適期は県北部が6月3～4半旬、県中央部・県南部が6月2～3半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	平年並	やや多い	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

## I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、潟上市予察ほにおける果そう葉の初発日は5月15日（平年5月20日）でやや早かった（ /+）。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病果そう率（芽基部病斑）は0%（平年0.2%）、発生地点率は0%（平年9.1%）でいずれもやや低かった（ /-）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、被害部位は除去し、園外へ搬出して処分する。

イ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。

ウ、有袋栽培の場合は、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は0.04%（平年0.05%）、発病果率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、発病の多い品種は、南水、八雲である。

イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、袋かけ前の防除を徹底し、散布後、早めに袋をかける。

エ、発生が予想される園地では、ナリアWDG 2,000倍液、ユニックス顆粒水和剤47 2,000倍液等を散布する。ただし、ユニックス顆粒水和剤47は単用せず、主剤に加用して散布する。ナリアWDGはSDHI剤とQoI剤の混合剤のため、単剤で使用する。

オ、多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤等を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシシ剤の使用回数は年間3回以内とする。

カ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	やや早い（前年よりやや早い）	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、4月下旬を除き、3月上旬～5月中旬の気温は概ね高く推移した（-/）。



イ、前年の収穫期の被害果率は平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するため、産卵状況に注意し、適期に殺卵剤を散布する。

ウ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

エ、合成ピレスロイド剤の散布適期は、県北部が7月上～中旬、県中央部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

オ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるので、これらの品種にかからないよう注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ナミハダニ	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、5月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.001頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は、1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤は、年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ）	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、前年秋期の越冬量調査におけるクサギカメムシの越冬数は、平年並だった（ /±）。

ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は73頭（平年26.0頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、合成ピレスロイド剤は6月下旬以降の使用とする。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤のため、総使用回数に注意する。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期 (感染時期)	発生量 (感染量)		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
輪紋病	平年並	—	平年並	防除剤の散布間隔は10日とするが、降雨が続くと予想される場合は7日とする。
リンゴハダニ	—	平年並	やや多い	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
ハマキムシ類	—	—	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ユキヤナギア ブラムシ)	—	平年並	平年並	シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。

J ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /± )。

イ、前年9月の巡回調査における発病葉率が4.6% (平年4.7%) で平年並だったことから、越冬量は平年並と推定される ( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アリエッティ水和剤は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱のおそれがあるため、落花7日後までに使用する。

イ、ホライズンドライフロアブルは果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブルは果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱を起こすおそれがあるため、散布時期に注意する。

ウ、Q o I 剤、Q i I 剤、カルボン酸アミド剤又はシモキサニルを含む農薬及びエトフィンフロアブルは年間1～2回の使用とし、同一系統薬剤を連用しない。特に、Q o I 剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除剤として使用しない。

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
2. 芽枯病	平年並 (—)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /± )。

イ、果樹試験場 (横手市) における展葉は、キャンベル・アーリーが5月4日 (平年5月5日)、巨峰が5月6日 (平年5月7日) でいずれも平年並だった (±/ )。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病芽率はキャンベル・アーリーで0.6% (平年2.2%) でやや低く、巨峰は0.3% (平年0.3%) で平年並だった ( /— )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、感染した新梢は翌春に芽枯症状を呈する。

イ、発病枝は剪去し、適切に処分する。

- ウ、開花期間に雨が多いと翌春に多発するおそれがあるので、オーシャイン水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを開花前に散布する。
- エ、上記の剤は耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の使用回数を年間1～2回とし、連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 灰色かび病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、5月中旬の巡回調査における発病葉率はキャンベル・アーリー、巨峰いずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、花冠、不受精果などの花き残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。
- イ、発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、適切に処分する。
- ウ、花穂の防除が重要であることから、開花前と落花後の散布間隔を10日以上空けない。
- エ、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
- オ、カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害（葉の白化）が発生するおそれがあるため混用しない。
- カ、開花直前にカンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、パレード15フロアブル、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、ネクスターフロアブルのいずれかを散布する。
- キ、落花直後にアミスター10フロアブル、カンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、パレード15フロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、ネクスターフロアブルのいずれかを散布する。
- ク、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- ケ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ～キに記した剤は、1薬剤年1回の使用に限定し、かつ同一系統の剤は連用を避け、耐性菌の出現を回避する。
- コ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 晩腐病（花蕾発病）	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、前年の収穫期巡回調査における発病果房率は、キャンベル・アーリーが3.0%（平年0.4%）で高い、巨峰が0.6%（平年0.8%）で平年並だったことから、越冬量はやや多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病花穂は摘み取り、適切に処分する。
- イ、笠かけ、袋かけは防除効果が高いのでできるだけ早く始め、遅くとも7月中旬までに終える。
- ウ、開花前にジマンダイセン水和剤、ゾーベックエニベル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを散布する。
- エ、落花直後にアミスター10フロアブル、ジマンダイセン水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、ゾーベック エニベル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- オ、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- カ、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
- キ、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除く上記の剤は、同一系統剤の使用を年1～2回に限定し、かつ連用を避け、耐性菌の出現を回避する。
- ク、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. チャノキイロアザミウマ	平年並 (－)	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている(±/±)。
- イ、前年の収穫期巡回調査における被害果房率は、キャンベル・アーリーは0.2% (平年0.1%) でやや高い、巨峰は0% (平年0.4%) で平年並だったことから、越冬量はやや多いと推定される( /+ )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤、ディアナWDG、テッパン液剤、合成ピレスロイド剤(スカウトフロアブル、バイスロイドEW)を散布する。
- イ、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。
- ウ、合成ピレスロイド剤の年間使用回数は1～2回とする。
- エ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大期以降の散布で果粉溶脱を生じるおそれがあり、その前または袋かけ以降に使用する。

## K 飼料作物

病虫害名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. アワヨトウ	－	やや多い（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、県内2か所の糖蜜トラップにおいて、5月1～5半旬の総誘殺数は3頭（平年1.1頭）でやや多かった（ /+）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

## IV. 気象予報

令和3年5月27日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（5月29日～6月28日）

### (1) 予報のポイント

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

### (2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

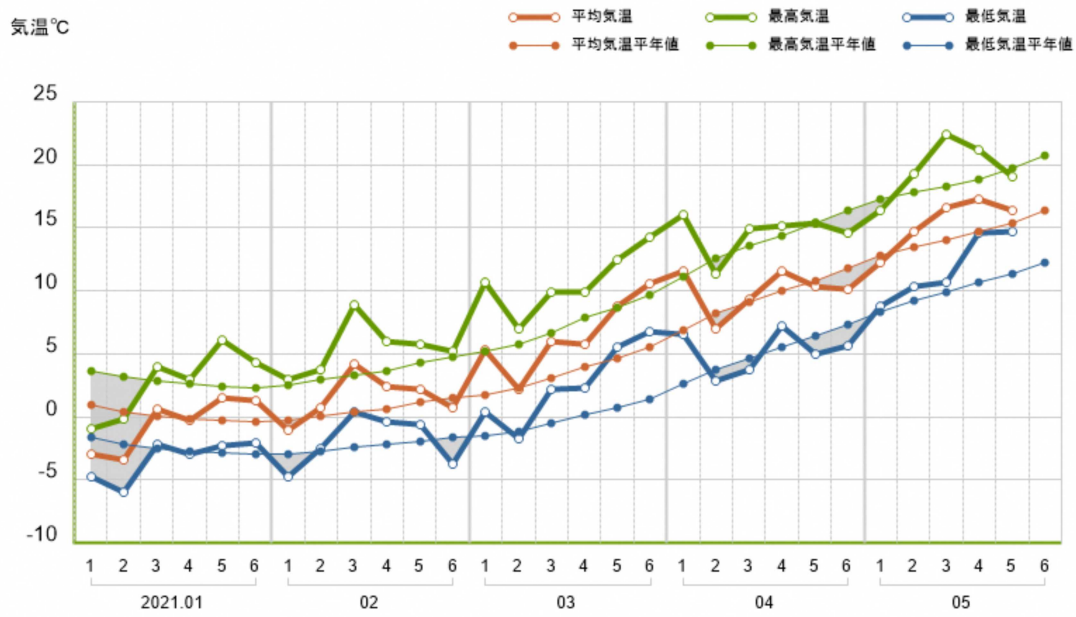
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	40%	40%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

### (3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

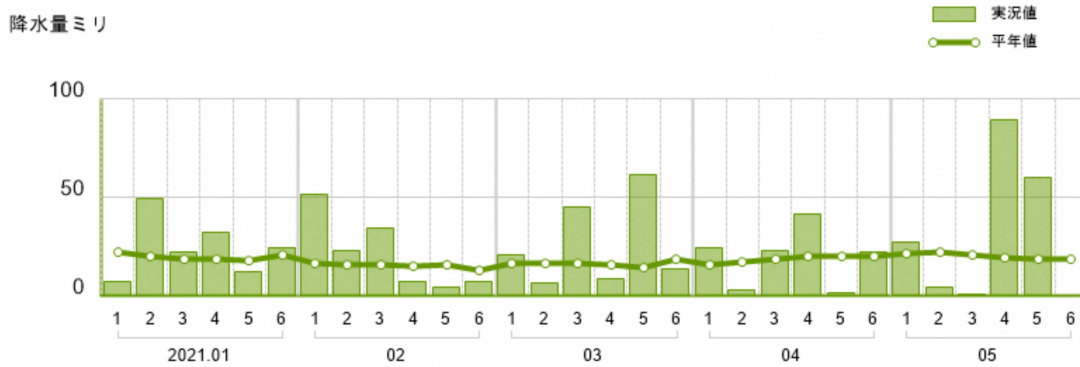
	低い	平年並	高い
5/29～6/4（1週目）	20%	50%	30%
6/5～6/11（2週目）	20%	50%	30%
6/12～6/25（3～4週目）	20%	40%	40%

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月5半旬 秋田県農業気象システムより)

### 気温の推移



### 降水量の推移



### 日照時間の推移



## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生日目からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

### 気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和3年度秋田県農薬危害防止運動  
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。  
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

**農薬の適正使用・管理の徹底を！**

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
  - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
  - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
  - ・ 防除履歴を必ず記録する。
- 農薬使用上の注意
  - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
  - ・ 家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
  - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
  - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
  - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。
- 農薬の取扱い上の注意
  - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
  - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。